

84年を閉じぬいて



蘇我支区廃止を許さない

蘇我支部 菰田庄一

今年も後わずかな日数を残すばかりとなつてしまいましたが、政府、国鉄当局の「赤字」を口実とした数々の攻撃がかけられてきました。

「赤字」は政府と国鉄当局の経営責任であつて、われわれ国鉄労働者に責任があるかのようなマスコミ等の宣伝に負けてはならないと思います。

「59・2ダイ改」、動乗動改悪、国鉄監理委員会による分割民営化にむけた、十万人首切り攻撃である首切り「三本柱」そして「60・3ダイ改」等、国鉄当局の攻撃はとどまるところを知りません。

一九八四年という年は、蘇我支部組合員にとって忘れることのできない年であつたと思います。あの全国一〇一基地合理化計画の中で、われわれの歴史ある蘇我機関支区廃止という許すことのできない提案を行つてきました。

ただちに開いた職場集会には、勤務以外ほとんどの組合員が集まり、全員で蘇我機関支区廃止絶対反対の方針を確認し、署名活動、立て看板作りをはじめ支部一丸となつて取り組んできました。

この廃止攻撃を粉碎するために、大塚支部長を先頭に10・10三里塚現地集會に見せた団結力をもって、さらに闘いを進めていこうと思います。

（支部副支部長）

85 団結旗開き

一九八五年一月十二日（土）午後一時～
千葉県労働者福祉センター大ホール

第一部 基調報告 午後一時～二時三〇分
第二部 連帯のあいさつとアトラクション
午後二時三〇分～五時



「戦後政治の総決算」を叫ぶ中曽根は、歯止めをはずした軍事大国化・改憲、核武装化の道へと突走っている。三里塚二期強行を宣言し、6月にはトマホークの導入を宣言し、9月には血ぬられた全斗煥をまねき侵略戦争への手を握り合つた。そして12月カールビンソンを寄港させ、軍費突進(GNP1%



戦争体制づくりにあせむ中曽根と対決し、反戦・反核闘争の先頭になつた

闘えば勝てることを示した

「3・25」、「10・10」

佐倉支部 田中龍美

一九八四年は、国鉄労働運動つぶしに對して我々国鉄労働者が反撃し、闘つて前進するか、大敗北を強要されるか。八〇年代中期階級闘争の未来のかがつた闘いの年でもあつたと感じています。

われわれ動労千葉は、国鉄労働運動つぶしが単なる国鉄だけの攻撃ではなく、日帝中曽根内閣の押し進める、臨調・行

革、軍事大国化―憲法改悪攻撃―戦争政策として、根こそぎ解体しようとする攻撃であり、三里塚闘争圧殺と同じ狙いをもつものとして、職場から反撃していく

ために、ストライキ体制でのぞみ、「3・25」「10・10」三里塚現地集會の組織

五割動員を実現し、私たち佐倉支部でもその一端をにないぬいてきました。特に「3・25」集會には、佐倉はじまつて以来の四九名が決起するという闘いを実現

しました。

この事は、職場既得権が、少しづつ奪われ、「このままではダメだ」「現場も変わり、何とかしたい」との組合員の意識が、三里塚決起となり結果したのであります。そして、国鉄当局に、闘う組織的団結を見せてつけ、強固な職場体制を創り出し、たと確信しています。

日本の労働運動が右傾化し、闘つても勝てないという中で、労働者は強固な指導、働きかけによつてかならず決起できる事を示した闘いが、動労千葉の三里塚五割決起ではなかつたのか。

こうした力こそ、「再度の八一・三ストライキ実現」への力となるだろう。

我々佐倉支部は八一・三ストライキを「本部」派のスト破りをうち破つて実現しました。そうした不拔の確信をもって今後動労千葉の一翼をにない、「60・ダイ改」粉碎、八五年国鉄労働運動の大高揚に向けて、七八名の組合員一丸となつて闘う決意であります。

（支部書記長）